

AG5 だよ

日本人学校・
補習授業校を
応援します！

海外で生活する子どもの教育を担う教師たち — AG5国内研修での学び —

AG5 委員・文部科学省国際教育課外国人児童生徒等教育支援プロジェクトオフィサー 近田 由紀子



AG5は、高度グローバル人材育成の最前線にいらっしゃる在外教育施設の先生方を支援するため、現地へ向けての情報提供や現地での研修・日本国内での研修および助言等を行っています。

本稿では特に、海外で新しいプログラム開発を行っている教師が参加した日本国内での研修について取り上げ、子どもたちを高度グローバル人材へと成長させる教師の感性や能力が、どのようにして磨かれるのか、参加者の充実した学びの様子や今後に向けての期待等からお伝えします。

国内研修概要

参加者は、AG5プログラム開発の拠点である次の研究提携校から派遣されました。国際バカロレア（IB）に準拠した実践を行っている香港日本人学校、二言語能力と二つの文化や社会を理解する能力を育成するための取り組みを行っている台湾の三つの日本人学校とダラス補習授業校、日本人学校を日本文化の発信の拠点として位置づけ、現地の日本人コミュニティのリーダー養成や親日的人材を育成する取り組みを行っているアスンシオン日本人学校、そして教員の指導力向上の取り組みを行っている上海日本人学校です。それぞれの国内研修の場や内容のポイントは下記の表に示す通りです。

参加者の学び

国内研修報告書全体を概観しますと、大きく四つのタイプの学びがあったようです。

- ① 新たな知識・方法を学ぶ
- ② 実践を比較して学ぶ
- ③ 日本型教育の良さを知る
- ④ 今後の展開を探る

本稿で全てを紹介することはできませんが、それぞれについて特徴的

研究提携校	国内研修場所	内容のポイント
香港日本人学校 (IBに準拠した教育実践の研修)	ぐんま国際アカデミー初等部、東京学芸大学附属大泉小・国際中等教育学校、海外子女教育振興財団	・イマージョン教育の視察 ・「探究科」や「MYP」の授業参観 ・英語教育の方法について受講
台北・台中・高雄日本人学校 (日本語指導等に関する研修)	静岡県浜松市立南の星小学校、同市立瑞穂小学校、静岡県菊川市立岳洋中学校、日本語教育学会主催シンポジウム（日本語教育学会主催：文部科学省「外国人児童生徒等教育を担う教員養成・研修モデルプログラム開発事業」受託事業シンポジウム）、海外子女教育振興財団	・公立学校にける日本語指導体制視察 ・「教科と日本語の統合学習」による授業の参観、外国人児童生徒教育担当教員との懇談 ・教員研修に関する情報収集 ・台湾の日本人学校における日本語年間指導計画について協議
ダラス補習授業校 (日本語指導・帰国子女教育に関する研修)	啓明学園、市川学園、首都大学東京、東京学芸大学附属大泉小・国際中等教育学校	・国際学級の教材や授業の参観 ・デジタル教科書等の活用視察 ・国際副専攻（グローバル人材育成AO入試）の帰国生との懇談 ・「探究科」や「MYP」の授業参観
アスンシオン日本人学校を中心とする地域：アスンシオン日本語学校、日本パラグライ学院 (日本文化発信のための資料作成方法・現地の子ども向け日本語指導に関する研修)	海外子女教育振興財団、海外移住資料館、静岡県浜松市立南の星小学校、同市立瑞穂小学校、同市外国人学習支援センター、静岡県菊川市立岳洋中学校、東京都小平市立上水中学校、啓明学園、東京学芸大学国際教育センター、東京学芸大学附属大泉小・国際中等教育学校	・移民カルタ等資料作成方法受講 ・公立学校に在籍する日系人児童生徒への「教科と日本語の統合学習」参観 ・地域の日本語教室参観 ・国際学級の教材や授業の参観 ・日本語指導方法に関する講義受講 ・「探究科」や「MYP」の授業参観
上海日本人学校 (新規採用「学校採用教員」の研修)	海外子女教育振興財団	指導力向上のための講義やワークショップ

な具体例を示しながら成果をお伝えします。

① 新たな知識・方法を学ぶ

バイリンガル・バイカルチュラルの視点から日本語力向上を目指す台北・台中・高雄日本人学校や北米のダラス補習授業校では、そのノウハウについて国内の先進校の実践にヒントを見出して、それぞれの地域の子どもたちの実態に即したプログラムを開発しようとしています。

台北・台中・高雄からの参加者は、外国人集住地域にある日本語指導の先進校（静岡県浜松市立南の星小学校、同市立瑞穂小学校、菊川市立岳洋中学校）を視察し、「教科と日本語の統合学習」や日本語の指導体制について学びました。教師や支援員の表情、実物や写真、絵などの使用、個別の丁寧な指導、児童の発達段階や能力に合わせて簡単に書き直したリライト教材やワークシートの有効活用、子どもたちの意欲的な活動や集中力等について報告しています。

また、学級担任、地域の支援者や保護者等との連携・協力は、台湾でも取り入れたいこととして受け止めたようです。訪問先の教師との協議において、子どもたちの日本語を学びたいという理由が①友人とのコミ

ュニケーション②授業が分かりたい、クラスとつながりたい等であることを確認し、在留国の環境は異なっても子ども「学びたい」「つながりたい」という気持ちや願いは同じであることに改めて気づかされた様子でした。

ダラスからの参加者は、啓明学園、市川学園、首都大学東京、東京学芸大学附属大泉小・国際中等教育学校の視察を通して、帰国生の「生の声」や彼らへの期待を知る一方、補習授業校で自尊感情が低くなりがちな子どもたちへの教育について、学んだり改めて気づかされたりしたことを報告しています。例えば、「教え方」の前に、子どもに寄り添うこと、「子どもが興味を持ちやすい教材を選ぶこと」「思考したことを文章にすること」「多岐にわたる文章を読むこと」の大切さです。さらに「発問は、子どもたちの探究心をくすぐり、子どもたちが『興味を持って、それとことん調べて理解しよう』とする姿勢を導き出すものであること」や、「教師 同士で『問い』の立て方を相談することもあること」などにも触れ、より具体的な指導スキルについても報告しています。

補習授業校でも子ども理解が第一であることや、児童生徒への問いかけ一つでも授業展開が変わることを実感されたようです。このような基礎・基本は、今注目されている「主体的・対話的で深い学び」を支えるものであり、海外で子どもたちを教える教師にとって価値あるものとして学ぶことができたようです。

② 実践を比較して学ぶ

AG5のプロジェクトが始まる少し前から香港日本人学校で取り組まれているグローバルクラス（以下香港GC）は、他の研究提携校に先駆けて実践を進めています。その手ごたえも課題もはっきりしているため、国内研修にも明確な問題意識を持つて望み、先進校の取り組みと自分たちの実践を重ねたり比較したりして学びを深めていました。

イマージョン教育を進めている「ぐんま国際アカデミー」を視察した際には、「教科担任制をとっているところは、香港GCと同じ。今後、日本人教師とネイティブ教師の二人担任制でどちらも対等の立場で学級運営にあたる体制は大いに参考になる」と記しています。

東京学芸大学附属大泉小学校「探究科」の視察においては、IBに準拠した単元開発そのものの学びとともに、「児童の思考の評価」について

着目していました。「ルーブリックというツールを使うことに力を注ぐのではなく、あくまでもロードマップ、自己評価の支援ツールとして目標とする児童の姿を描いて利用していくこと」に注目し、自分たちが目指すべき方向性を確認していました。

すでにIB校としての実績がある東京学芸大学附属国際中等教育学校SGH発表会での生徒のプレゼンテーションや、英語担当教員による講義でも、香港の子どもの姿を重ねながら熱心に耳を傾けていました。

香港GCの場合、これまで数回にわたって行われた日本の先進校での研修を重ねることで独自のプログラム開発が推進されたといえます。海外のインターナショナルスクールにはない日本人学校の新たな魅力が、このようなプロセスを経て生まれていることはとても興味深いことです。

③ 日本型教育の良さを知る

パラグアイのアスンシオンでは、南米日系人コミュニティに適した日本型教育・日本語教育のプログラム開発を目指しています。そのため、参加者たちが日本での派遣研修を通して学んだこととして、次のような点が挙げられました。

・日本在住の日系人が求められてい

る日本語力と外国に住む日系人が求められている日本語力の違い（生活言語能力、学習言語能力）

・日本語の評価方法
・グローバルスタンダードの教育の必要性

・児童生徒一人ひとりのことを考えた教材作り
また所属校に還元したいこととして

・規則やマナーはみんなが見えるところに掲示

・多読の本や『はやくちこぶた』『言葉のテール』等の教材

・ビブリオバトル

・CAN-DO ポートフォリオを作成

・日本の文化・習慣の継承（掃除、靴を揃えておく、挨拶、時間厳守等）

について報告しています。この中でも、やはり「日本の文化・習慣の継承（掃除、靴を揃えておく、挨拶、時間厳守等）」への関心は高く、教室以外の場所でも盛んに記録写真を撮っていたことが印象的でした。

④ 今後の展開を採る

AG5 国内研修では、教育現場の視察だけでなく、運営指導員委員・研究員らとともにこれまでの実践を振り返り、今後の展開を検討するための協議もじっくりと行いました。

香港日本人学校でのプログラム開発については、香港GCのこれまでの実践資料収集、訪問調査の実施、小四・五の学習の評価法、評価基準の開発、グローバルクラスの成果の可視化等を進めることを決めました。

台北・台中・高雄日本人学校でのプログラム開発については、台北・台中日本人学校における日本語指導年間計画を子どもたちの生活や教科学習と関連させて作成することや、高雄日本人学校と現地校との交流の方法について協議をしました。

日本語指導年間計画作成では、日本語支援における台湾の子どもたちのニーズと日本の学校に在籍する子どもたちのニーズとは異なることから、視察での学びを生かしつつ、より適切な指導内容・方法について活発な議論がなされたことが印象的です。

また、アスンシオンからの参加者は日本での国内研修を終えてパラグアイに帰国後、アスンシオン日本人学校での報告会を実施しました。ここでは「AG5プロジェクトに活かしたいこと」として、

- ・パラグアイ版移民カルタ等の作成
- ・アスンシオン日本人学校、アスンシオン日本語学校の生徒が利用できる、日系人移住の歴史も含むパ

ラグアイ社会科の副読本を作成を発表しています。具体的な取り組みを明確に打ち出して前進しようとする姿は、報告会に参加した方々にも輝いて見えたことでしょう。

教師の成長と広域ネットワークへの期待

新しいことを始めようとする時、意欲的にチャレンジしようとする教師が全体を牽引する一方で、「戸惑いを隠せず躊躇する教師も少なくないでしょう。しかし、今回の取り組みにおいては、実際に先進校の教育を目の当たりにし当事者の話を直に聞くなどして学ぶうちに、自分たちにもできそうだ・やってみようという気持ちに変化していくことが分かりました。報告書には「想定以上の成果」という表現もありました。

さらに、国内研修を受け入れた日本の教師たちへの影響も大きく、彼らに重要な気づきをもたらしてくれました。海外で日本語や日本人としてのアイデンティティを大切にしている教師の真摯に教育活動をされている教師の存在、エネルギーに学び取ろうとする勢いや願いに感銘を受けたのです。内なるグローバル化を大いに刺激する機会でもありました。

また、北米のダラスや南米のアスンシオンの教師のように、日本での研修をともにすることで、海外にいる「同志」として勇気づけられたと言います。言い換えれば、それだけ海外で孤軍奮闘されている方々が多いのかもしれない。

このほか、海外に赴任する前の研修として、上海日本人学校の協力を受け、新規に採用された同校の学校採用教員に対して「学級経営・生活指導・危機管理」や「授業」等に関する講義やワークショップを行いました。派遣前に効果的なプログラムを把握するうえで有意義な取り組みになりました（本年度より別のプロジェクトに移行）。

このように日本での研修は、海外での明日の授業にすぐにも活かせるノウハウの習得のみならず、教師たちのネットワーク構築にも一役買えたようです。この広域ネットワークによる多様な情報共有や学び合いは、新たな教育への気づきを促し、教師自身がグローバルな人材として成長するチャンスとなるはずです。そして、そこで磨かれる教師の感性や能力が、子どもたちをまさに高度グローバル人材へと成長させる大きな力となることを確信させてくれました。